とある人形師の英雄譚

白雪の人形師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人形師が魔法学校の仲間たちと敵と戦ったり共に成長したり恋愛をしたりする物語です。

目　次

第1話　とある人形師と魔法学校　1
第2話　とある人形師と模擬戦　―　5

第1話　とある人形師と魔法学校

～プロローグ～

昔々あるところに人形師がおりました。
その人形師の人形は、とても美しくまるで本当に
生きているようだと言われていました。
その人形はお姫様やお金持ちの娘さんたちしか買って
もらえない程のもので瞬くまに噂が広がりました。
その男は、名を　アシュト＝カイザー　と言いました。

第1章　英雄譚の始まり

ここは、アイランドオブウィザードと呼ばれる人口島だ
ここには、約３００人に1人の割合で生まれる魔法使いの学校がたっている。
魔法高等学校２年３組には、いつもの朝の声が響いていた
『ホームルームを始めるさっさと座れガキども
５秒以内に座らないないやつには、成績にバツをプレゼント
してやる』

「千影（ちかげ）ちゃんそんなの酷いよー」
千影『先生をちゃん付けで呼ぶな』
今千影先生と話しているのは、私の親友
ローゼン＝アスティいつも元気がいい優しい子です。
千影『えー今日は、編入生を紹介する。』
アスティ「先生その人は、男子ですか」
またアスティが喋ったでも魔法使いの中で
男子は、５％ほどしかいないので聞いてもあまり意味はない。
千影『えー編入生は、なんと男子だ。』
「えー嘘～」「イケメンかなー」
クラスのみんながざわつき始めたちなみに
うちの学校は、男子が１人もいない
千影『あーお前らうっさい静かにしろ
編入生入ってこい』
扉がガチャリと音をたてて開いたそこから、黒よりも黒い
ローブを着た男が入って来た髪は、長く目にかかっていた。
千影『編入生自己紹介をしろ。』

編入生が黒板にチョークで　榊　黒夜　（さかき　くろや）
と書いた　。
黒夜「榊　黒夜です。得意な魔法は物質変換や物質生成
使用する魔具は、魔法剣や魔法銃です。」
千影　『じゃあ榊の席はフィーナ＝エイリンの横だ
榊わからないことがあればエイリンに聞いてくれ』
急に名前を呼ばれてビックリした
黒夜　「エイリンさんよろしくお願いします。」
エイリン「あっよろしく私は、フィーナ＝エイリン
エイリンでいいし敬語じゃなくていいから」
黒夜　「じゃあよろしくエイリン俺も呼び捨て
でいいから。」
アスティ　「ヒューヒューお熱いねー」
アスティが茶化すするとみんなも
「あーうらやましー」「ヒューヒュー」
と茶化して来た
エイリン「エイリンもみんなもからかわないで

黒夜くんも困ってるでしょー。」

アスティ　「呼び捨てじゃなくていいのー」

エイリン　「アスティ～～」

「ごめんね黒夜くんみんな悪気があって言ってるわけじゃないのよ」

黒夜　「わかってるよエイリン気にしないで」

こうして私達の物語は、呼吸を始めたのです。

～エピローグ～

君は、アシュト＝カイザーの話の続きを知っているだろうか？

そう表では、語られないもう一つの話を…

だがこの話はまた次の機会に

第2話　とある人形師と模擬戦

～プロローグ～

さあ、もう一つのアシュト＝カイザーの話しをしよう。
そうこれは、決して表舞台では語られることのなかった話しだ。
それは、アシュト＝カイザーが魔法使いだったという話しだ
しかし、それだけではたいしたことはない
そうお察しのとうりそれだけではではなかった
なんと彼は、自分の人形に魂を宿らせることができるというのだ
いささか信じ難い　だが彼の人形がひとりでに
動いているのを見たという人は、少なからずいるのだ…

第1章　　人形師と英雄譚

ここは、アイランドオブウィザードの男子寮だ内装そこらへんの高級ホテル
にひけをとらないがガランとしていて物悲しい
ピピピピピッ携帯を見るともう学校に行く時間だ

放り出していたカバンを拾い上げ部屋をでる
学校に向かっているとあちこちから視線を感じる
やはり男の魔法使いは、めずらしいのだろう
黒夜　「うーん　やっぱり男ひとりはキツイな」
クラスメイトからの視線を感じながらも
二時間目の終わりを迎えた
千影　『お前ら３・４時間目は、魔導実技だから
とっとと着替えて第３アリーナに集合しろ。』
黒夜　「えっと男子更衣室は、何処にあるんですか。」
千影　『あるにはあるが今は物置として使われてるから
お前はここで着替えろ。』
千影　『えー今日は魔導祭にむけて模擬戦を行う魔導祭を知らない
奴のために説明しておくが魔導祭とは１年に一回
行われる　魔法校同士の戦いだ　とりあえずお前らランクご
とにわかれて　模擬戦をしてもらう』

アスティ　「ところで黒夜君は、ランクは何なの？」
黒夜　「僕はランクなしなんだ…」
【ランクとは魔法使いの序列のようなもので
ＳＳＳ　ＳＳ　Ｓ　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ　Ｅ　ランクなしの
順である】
アスティ　「そうなんだ」
西園寺　「そこの転校生私と勝負しなさい」
黒夜　「あなたは？」
西園寺　「あなたこのクラス委員長であり西園寺財閥次期
当主であるこの私を知らないんですの」
千景　「よし黒夜、西園寺と模擬戦をしろ」
エイリン　「ちょっと先生西園寺さんは、Ｂランク
なんですよ」
千景　「いいから黙って見てろ」
エイリン　「黒夜くん危なくなったらすぐに降参してね」
黒夜　「大丈夫だよエイリン」
千景　「ルールを説明する勝利条件は、相手を

だ　　気絶させるか相手がこうさんするか
は　　武器は殺傷能力の低いものとし魔法
第三階級魔法までとする」
＼魔法は第　１～１０までそのうえに固有魔法があり
第７階級魔法が使えるのは、１５％程である／
西園寺　「逃げるなら今のうちでしてよ」
黒夜　「大丈夫です」
千景　「それでは戦闘開始」
こうして模擬戦の火蓋は、切って下されたのだ
～エピローグ～
こんな話を聞いたことがあるだろうか
１００年ごとに現れ世界にひとつの物語をのこす
男の話をその男はある時は人形師だったという